

動の世界に入らしめ、有限境から無限境に逍遙せしむる技能を有する者のこととて、言ひ換へれば、詩人とは目に見えない世界と接觸して自分が感じた感動に、形體を與へて是を讀者に示してくれる人、即ち創作する人のことであると言つたことを、漱石はよく知り抜いてゐたのである。だから漱石は、自分のタンペラマンを透ほして見た世界に於て、これは美だ、これは眞だと感じたものを詩に詠出して我々に示したのである。だから詩が生きてゐる、諷刺として動いてゐる、躍つてゐる。この點が漱石の漢詩と日本の在來の漢詩と全く異なる處である。

日本人が作る在來の漢詩の多くは、實は創作ではない。支那人の詩の模倣であり、踏襲であり、口眞似であり、焼き直しであり、假聲である。啻に、その字句だけの模倣や踏襲に止まらず、その意味、その意匠までも皆支那人が千年も二千年も前に既に言ひ古していることを繰り返して述べたものに過ぎない。所謂温め返しであり、附け焼刃である。試に日本人の作になる漢詩を讀んで御覽なさい。大概の詩が創作ではないのだから、そこに何等の新意もなく新味もなく、特にその個性やその時の氣分などは少しも現はれてゐないのである。一例を示す爲めに、今、手近にある春濤詩鈔を手當り次第に開けて見る。先づ開卷第一に

新秋夜望

過雨痕涼蟲語初。高梧葉墜^テ月臨^{ムニ}徐。
不^レ知憂患從^ニ何處。燈火風檐坐^{シヤ}讀^レ書。

古い古い、そして何等の感動をも讀者に與へぬ。フランスの誰やらが、感動を與へぬものは詩ではないと言つた通り、これなぞはたしかに詩ではない。ただ有り觸れた字句と、東坡が八百年も前に言つた讀書は憂患の始と言ふ言葉を借り來つて、彼れ是れ繼ぎ合はせたに過ぎぬのである。どこに詩趣があるか？ この詩のどこに面白味があるか？

一頁をめくる。すると次ぎに「秋思」と云ふのが目に留まる。

風慘澹兮雨淒其。客心傷兮秋氣悲。
燈明滅蟲啾唧。夜深沉葉蕭瑟。

と云ふのである。その字句もその意味も共に古臭芬々と鼻を衝くを覺える程に微臭いものである。それもその筈だ。僕達が青年時代に漢詩を習つた頃、毎度御厄介になつて至極重寶な、歴代詩學精選を引き出して見ると、その秋の部に於ける秋夜と蟋蟀の類語集の中

には、右の詩句中の風惨澹も雨淒其も客心傷も、秋氣悲もさては燈明滅も、蟲唧々も、夜沉々も、落葉も、蕭瑟も、みんなそれぞれの熟語が明かに出してゐるのである。つまりこれら等の語は千年も二千年も昔から行はれてゐる熟語なのだ。これでは、とても清新な詩などの出来る筈がない。新しき酒を古き革囊に盛ること勿れとさへ言ふに、これはまた古き酒を古き革囊に盛つてそして今人に勧めるのだ。今人の口に合はぬことは言はずして明かなことである。しかもこれが一代の詩宗を以て自ら任じてゐた森春濤先生の詩であるに至つては、ただただ呆然たらざるを得ない次第である。支那人の詩評の言葉に、大倉の栗の如く陣々相因る甚だ食ふべからずとあるが、これは春濤先生のこれ等の詩評として説へ向きの言葉だと思ふ。

これ等の詩に較べて見ると、漱石の詩は字句の洗練は兎も角、確かに個性があり清新味があり、獨創がある。秋の詩を尋ねて來る。八月三十日の作に係る無題の詩に、

經_ニ來世_一故_ニ漫_一爲_レ憂。
誰道_カ文_フ章_ニ千_ニ古_ニ事_一(中略) 大悟_レ何時_ニ臥_レ故_ニ丘_一。
昨日_ニ閑庭_一風雨急_一 芭蕉葉上復_タ知_レ秋_一。

この詩は漱石詩集中に於てはあまり好い詩ではないが、それでも「明暗」執筆中の情趣や、その時の感興がありありとよく現はれてゐる。春濤の「秋思」と較べて読んで見ればその優劣は多辭を要せぬ處である。

ことに「菜花黃」の一首の如きに至つては、野原一面の菜の花の黄の上に、雲雀が天に冲して鳴いてゐる光景とその情懷とが、よく詠じ出されてゐて、新味たつぱりな佳作である、恰も英詩を讀むやうな興味にそそられる。一句一句を解剖して批評しては詩を殺して了ふ恐があるから、評語などを加へずにその全首をここに掲げて、讀者と共に心賞することにする。

菜花黃
菜花黃_ニ朝_一喰_一。菜花黃_ニ夕_一陽_一。菜花黃裏人_一。晨昏_ニ喜_一欲_レ狂_一。
曠懷隨_ニ雲雀_一。冲融入_ニ波_一蒼_一。縹緲近_ニ天都_一。迢遞凌_ニ塵鄉_一。
斯心不_レ可_レ道_一。厥樂自_ラ潢洋_一。恨未_下化_{シテ}爲_レ鳥_一。啼_キ盡_{シテ}菜花_一黃_ト。

實によいではないか?

漱石詩集中には、よい詩境や詩趣や、佳句が随分少くない。例へば、「函山雜詠」の雲、

從^{ヨリ}鞋底^ニ湧^キ。路^自相頭^ニ生^ヌや、山老^テ雲行急^ニ。雨新水響^ニ多^モ面白い。離愁似^レ夢迢々淡^シ。幽思同^レ雲澹々間^ニの如き、又は高秋悲^ニ鬢白^ニ。衰病夢^ニ顔紅^{ナルヲ}は佳對と稱すべきである。若しそれ斜陽滿徑照^レ僧遠^シ。黃葉一村藏^レ寺深^シ。何等の佳趣ぞ。特に大正五年八月十四日以後「明暗」執筆中の作に係る七律は、いづれも皆、好詩たるを失はぬ。中にも紅桃碧水春雲寺。暖日和風野鶴村や、託心雲水道機盡^シ。結夢風塵世味長などは、雅趣眞に掬すべきものあるを覚える。

かくの如き清新味と、その時々の氣分とをよく言ひ現はした點においては、確に漱石は漢詩に於ても一見識を持つてゐた事が解かる。惜哉、天、年を假さざりしが爲めに詩の數も多くはなく、また字句の圓熟せない處はあるが、併しそれにも拘らず、これだけでも既に他の日本の漢詩人達とは較べものにならぬ程立ち優つてゐる。何故かと云ふに、彼はその字句もその意匠も決して他人を蹈襲しなかつた。彼の詩は彼の創作であり、彼れ獨自の詩であるからである。この點に關しては彼は歐洲詩人と等しく卓然たる見識を持つてゐたことが知られる。アルフレッド・ド・ミュッセが、バイロンの詩風を模倣したと批評された時、昂然として、

「余が杯はさほど大きくはないにしても、余は余の杯を以て飲む。決して他人の酒杯を借らず」

(Mon verre n'est pas grand, mais je bois mon verre)

と豪語したことが思ひ合はされるやうな氣がする。

要するに、漱石の詩は彼の創作であつて、蹈襲でもなければ、口眞似でもない。だから言々皆な眞趣、句々皆な實境である。爲めに讀者をして何遍繰りかへして讀んでも倦ましめぬのである。この一事は日本の漢詩界には極めて稀なことである。と云ふのは漢詩の本場の、支那にあつてさへ、萬篇一律、千首同調の譏を免かれぬ詩人が多いのである。これは元來、支那人の尙古癖から出て來てるらしく思はれる。詩と言へば、支那人は唐に在つては必ず李杜韓白を揚げ、宋に在つては必ず王蘇黃陸を稱し、専らこれ等の古人に似んことをこれ努めてゐるのである。だから自然その詩は、字句も、意匠も、構造も、詩型も、これ等古人の範疇を脱する事が出來ず、随つてその詩界に新境を開くことを敢てしないのである。誰の詩も、彼の詩も、皆同じことであつて個性もなければ、清新さも缺けてゐるのである。論より證據には、支那人が人の詩を賞める時に『これを杜甫集中に置くも甄別し能はず』などと言つてゐるのを見てもわかる。嚴滄浪の如きは『詩の是非必ずしも争はず、試みに己が詩を以て、之を古人の詩中に置き、識者と之を觀て、而して辨する能はざれば、則ち眞に古人なり矣』とまで馬鹿なことを云つてゐる。

これ程に古人を眞似することに専念したのである。だからその結果百人一色、千篇一律

で、何等の清新もなく、何の奇瑰もない詩ばかりになつて仕舞ふ。そこで袁隨園はこれを慨して、祝芷塘太史に與ふる書に於て、徒らに古人を模倣するの弊習を痛快に罵倒してゐる。「閣下の詩大いに韓杜に似たる處あり。然れども讀者既に眞の韓、眞の杜の詩を讀む。又誰か肯て韓に似、杜に似たるの詩を讀まんや」と云うてゐる。明の鄭少谷、少陵の詩を學ぶ。その友、林貞恒は譏つて曰ふ。「時、天寶に非す。官、拾遺にあらず、徒らに悲哀激越の音に託す、病なくして呻吟するものと謂ふ可し」と言つてゐる。而して隨園は是に著語して、「杜を學ぶもの知らざるべからず」と言つてゐる程である。

支那人にして既に此の如し。ましてその弟子分たる我國の漢詩人達が、これより尙ほ甚しきものあるは敢て怪しむに足らぬのである。今、試みにその一例として詩人を以て自から任する某氏の詩鈔から、これも手當り次第に一二首を摘錄してその一斑を示して見よう。

湖上雜詩

遠山黛色一蒼蒼。平楚鬱環洲渚長。

水碧沙明人倚櫂。綠蓑衣帶白蘋香。

入慶州

迢迢驛路挂城西。墟落晴煙日欲低。

野笛吹殘黃犢臥。何王陵上草萋萋。

なるほど字句は瑠璃流麗である。流石は文字の國の支那人が二三千年前の彫琢を経て來たものだけある。併しこれ等の詩はその調子もその構成の仕方も、その意味迄も唐宋以來の支那人のどの詩集を繙いて見てもざらに見當る詩句であつて、何の異つた處もない。ある。そしてこの湖上雜詩は琵琶湖を詠じたのであるが、一讀した處では寧ろ南方支那邊のある湖水を詠じたものかと思はれる程で日本の氣味や風色は少しもこの詩では感する事が出來ない。特に入慶州の詩に至つてはその意匠も字句も既に數百年來支那人が使ひ古したものである。右は單にその一例にさへ過ぎぬのであるが、日本人の漢詩の多くが殆どこれに類したものである。ルミー・ド・グウルモンはその「面の本」の中に「存在すると云ふことは他と異なることである」と言つてゐるが、して見るとこれ等の日本人の漢詩などはその存在の價値さへ疑はれるやうなものだ。特にアンドレー・シユアレスはその「シユール・ラヴィ」の中に於て『生氣瀆刺として而かも特異性を帶びざるものは藝術ではない。既に世間にありふれたものは藝術と云ふべきではない。見よ、大藝術家たるものは凡て皆

その個性を鄙やかしてゐるではないか』と。日本人の漢詩に缺けてゐるものは正にこの個性である。日本人でありながら、その人の作つた漢詩を見ると、支那人かと思はれるのが澤山ある。而してそれが却つてよいのだとしてあるのだから、驚かざるを得ない次第である。近代の『詩』と云ふ考へと漢詩人達の考へとは正反対である。彼等は時代も國境も超越し而かも沒我的で沒個性的であるから、進歩した今日の『詩』と云ふ考へから見れば、彼等漢詩人達は正に時代錯誤に陥つてゐるのである。

然るに漱石が、漢詩を作りながら、その弊に陥なかつたのは、彼が近代的の『詩』なるものの意味をよく解してゐたからであると思はれる。

そもそも日本に於ける漢詩なるものは詩の本來の性質から論じて見ると無理な存在である。文藝なるものは動植物と同じくその土地の產物なのである。江南の橘、これを江北に移せば枳となる。漢詩の橘は支那に於ては香の高い、色のよい、味の雰いものであつても、是を日本に移したら、枳とさへなり得ないで、根も張らず、枝も延びず、葉も縮み、色も香も無いえたいも知れぬ變て、こな樹となつて仕舞つたのである。隋唐との交通が開けて以來日本人で漢詩を作つた者その數極めて少しとせず、その詩集も亦た所謂汗牛充棟音ならざるにも拘らず、日本人の口に膾炙してゐる詩はと言へば僅かに指を屈して數ふる事が出来る程少數なものである。例へば賴山陽の鞭聲蕭々、雲耶山耶、又は文政之元十一月と鐵

兜の延元陵下。竹外の落花深處と比良山一角その他幕末志士の作に係る一二三首の絶句位にしか過ぎぬのである。そしてこれ等の詩が日本人の口に膾炙する所以は、その詩が詩として傑作であるからではなく、寧ろその詩が總ての點に於て日本的であるからと云ふ理由に基くのである。だから支那人から見て好い詩だと賞められてゐる星巖や淡窓や旭莊の詩は日本人中には知つてゐるものさへ少ないのである。しかのみならず、上に掲げた日本人に感興の深い詩は師匠株の支那人からは却て和臭なりとして斥けられるのである。茲に至つて日本に於ける漢詩なるものは、和たらんか？ 師匠の支那人に斥けらるるを如何せん。漢たらんか？ 本國の日本人に一顧だませられざるを如何せん。實に進退維谷の窮境にあるものと云はざるを得ない次第である。これ即ち日本に於ける漢詩なるものの存在がその根本に於て不自然なることから流れ出る必然の結果であり因果である。先づ早い話が精力を盡くして作り上げた漢詩を、自分では最上の作と思うてゐても、一言支那人からこれでの善惡は自から判断するを得ざる情けない境遇にあるのである。如何となれば日本に於ける漢詩は自國語を以て書かれてないからである。弊根は實に茲處にある。

シャトーブリヤンも嘗てこの事に論及して言つたことがある。曰く『如何に聰明な人で

あつても、文藝上の作品に就ては自國語を以て書かれたものでなければ、その善惡を判定する能力のないものである。如何となれば、外國語なるものは例令その根本迄もよく精通せりと確信する人に在りても、到底附け焼刃たるを免がれぬものであつて、乳房を含ませながら乳母が教へた自國語とはとても比較にならぬものである。切言すれば外國語には乳母の乳汁が足らないことである。特にあるアクセントに至つてはその國の人だけにしか解からぬものがあるものであるから』とまで云うてゐる。

支那のある詩話の本に、「詩は音節を貴ぶ。然れども音節のこと、言を以て傳へ難し。少陵の群山萬壑赴荆門の句に於て、若し群の字を改めて千の字と爲さしめば、即ち調に入らず。王昌齡の、不斬樓蘭更不還の句に於て更の字を改めて終の字に爲さしむれば、これ亦た調に入らず、字義は一なり、而かも之を毫釐に差ひ、失ふに千里を以てす」とあつた事を記憶してゐるが、これは丁度シャトーブリヤンの言うたことを裏書したやうなものである。詩の音節の微妙な處に至つては外國人には到底解かる筈のものではない。

特に日本人の爲めに漢詩の不自然なことは、その最も精力を費やし、刻苦慘澹して學習し且つその詩作に當つて最も苦しめらるる漢詩の韻字平仄なるものは、漢詩を訓讀する日本人に取りては何の用にも立たない全くの徒勞なのである。換言せば最も不必要な處に最も多くの精力を費やすと云ふことになるのである。例へば廣く日本人にも知られてゐる王

維の送別の詩

和訓読み

渭城朝雨浥輕塵。
渭城の朝雨輕塵を浥ほす
客舍青々柳色新。
客舍青々柳色からだ新なり
勸君更盡一杯酒。
君に勧む更に一杯の酒を盡せよ
西出陽關無故人。
西陽關を出づれば故人無からん

に就て見るに、塵、新、人この三つの韻字は、支那流に棒讀にする處に韻字の存在の意義がある。それを日本流の訓読みにしては韻字は少しも韻字の用を爲さないのである。且つこの韻字は支那流に棒讀みにするのでこそ、吟誦の際に於てその音樂的諧調は啻に耳に快よきのみならず、その詩の意味に一種言ふべからざる深さと色と香とを添ふるのである。それでこそ韻も役に立つのであつて、恰も我が俗謡の

坂は照る照る。
鈴鹿は曇る。

間の土山

雨が降る。

の。の字に於けるが如く、又

思て通へば。
千里も一里△
逢はで歸れば。
また千里△

又は

伊勢は津でもつ。
津は伊勢でもつ。
尾張名古屋は
城でもつ。

の如く偶然かも知らぬが兎に角確に韻が押んである。若しこの韻字の一つでも他の字を

以て代へたならば、唱詠の際に啻だに語路の舌足らぬのみならず、興味もまた索然として歌全體の調子を破壊して、臺なしにして了ふのである。

漢詩を日本流の訓讀にするのは、これよりも尙ほ甚しいのである。だから漢詩の妙味の大半はそこで既に減殺されて了ふのである。

支那にゐた時、僕の支那語の先生が、杜牧之の阿房宮賦の面白い處はその冒頭の句に悉く入聲の韻を押んだ處にある。即ち六王畢。四海一。蜀山兀。阿房出。覆壓三百餘里。隔離天日（日、質古通韻）と、その音調の突兀な處が如何にも阿房宮賦の冒頭としてふさはしいのである。然るにこれを六王畢。四海一なり、蜀山兀として阿房出で、三百餘里を覆壓して、天日を隔離す云々と日本流に讀んで了つたのは、阿房宮の突兀たる光景も、情味も、少しも出はしない、と話した事があつたが全くその通りであつて、漢詩の韻字は日本風に是を讀む時には全く韻字の用を爲さぬのである。だから詩に最も必要な音樂的要素を没却してしまふ事になるのである。況んや平仄の如きに至つては日本流に訓讀する際に於ては、詩とは全く無關係なものとなつて了ふのである。無關係なものでありながら、しかも作詩に當つて一番骨の折れる厄介至極なものである。作詩の際に平仄の爲めに束縛されて、自分の言はんと欲する事をそのまま言ひ現はすことが出来ないで、止むを得ず、心にもない詩を作り出すことがあるのは、漢詩苦作の経験のある人達の微苦笑しつつも首肯す。

かることであらうと思ふ。

しかのみならず、作詩するに當つて選ぶ處の韻字なるものは、今より少くとも一千四百年以前に沉約が定めた四聲譜に基いた唐音に依るものなので。現今の支那人でさへも是を知るは難しとなすものであるのに、發音の全く異なる日本人に取つて、是を一々記憶するの困難なることは、實に言語に絶すと云ふべきである。だから日本の漢詩人はその作詩に方つては必ず詩韻含英又は韻府一隅の如き韻書を傍に置いて是に依てその韻字を定めるのである。だからその韻字の爲めの故に、作らんとする詩の意味さへも左右されるものが多いのである。若し極言するならば、日本の漢詩は性情の流露ではなくて、韻書と首ツ引で作り上げた文字の細工に過ぎないのである。而してその韻書に出てゐる韻疎、又は類語、熟語なぞはいづれも皆唐宋以來幾百回と繰り返されたものであるから、それ等の語彙を集めて出来上つた日本の漢詩に清新の氣などのあらう筈がない。まして奇矯險恠にして、フランス人の所謂「アルヂー」人を驚かすの妙句、例へばダンテが始めて用ゐた『沉默せる太陽』『光が啞となつた場所』、『嘎枯聲の光澤』、『黒い空氣』、『鉛色の沼澤』の如き、寸語よくその境地の景情を言ひ現はすものの如きは、日本の漢詩人には得て望むべきではない。日本に於ける漢詩人は昔から今日迄その數に於て決して少なりと云ふべからざるにも拘らず、世に傳はる程の傑作の割合に少ないのは全く是等の理由の爲であつて、必ずしも

才力に於て日本人が劣つてゐるからではない。その執る處が他人の武器であるからである。フランス近代の大詩人、シユリー・ブリュードムは言つてゐる『詩は人の心から溢れる呼吸である。だからその反應で他人の心を感動せしむるのは當然のことである』と。然るに我邦の漢詩なるものは小手先きの細工であり、冷たい理智上の技巧である。だから人心を感動せしめないことが當然であるのだ。

マダーム・スタエルが露國人やボーランド人の作ったフランス語の詩を評した言葉が如何にもよく日本人の作った漢詩の評に當て嵌まるから、ここに引用してみる。曰く『露、波兩國詩人の作るフランス語の詩は、丁度中世紀に於て、フランス人が作った羅甸語の詩によく似てる。これは全く記憶力の仕事である。抑々外國語なるものは之を習ふものに取つては常に死語である。死語を以て、人を感動せしむるが如き生きた詩を作らんと欲するものがすでに無理な註文である。自から感じたままを詩に於て表現するには、その國の空氣を呼吸しその國語を以て考へ、喜び、悲しまねばならぬものである。如何となれば詩は意義ばかりを尊ぶものではないのであつて、寧ろ感情が重なるものである。生きた感情は死語では言ひ現はされる筈のものではない』と。

スタエル夫人は續けて言ふ『模倣したものの中には自然さがなく、生命がない。だからフランスを（支那を）模倣した凡ての作品は、アリオストがその劇作「ローラン」の中に

於て彼（ローラン）が到る處へ引き連れて行く彼の愛馬の頌辭が至極よく當て嵌まるのである。曰く「この馬は馬としてのあらゆる好い資質を具備してゐるが、ただ一つ缺點がある。それは彼が死馬であることである」と。

日本に於ける漢詩は全くこのローランの馬である。

だから私は言ふ。漱石の詩は日本に於ける漢詩中に於て個性あり、獨創あり、清新の氣味はあるにしても、我國に於ける漢詩全體が持つ所の弱點は矢張免がれ得なかつた。換言すれば、讀者の胸にぴたりと來ないことである。まだ一脈のその間に存するものがあつて、どうしても隔靴搔痒の感を免がれ得ないことである。隨て感涙に咽ばしむるやうな詩や、喜び極まつて抃舞させる様なものは日本の漢詩には決してないのである。これは漱石の罪ではない我國に於ける漢詩が一の例外もなく、免がれ得ざる因果である。要するにその存在が不自然であり、無理であるからである。江南の橋であり、ローランの馬であるからである。

だから江南の橋を我國に移して繁殖せしめんと欲せば、先づ日本の氣候、風土に適するやうに「アックリマテーション」を施さねばならぬ。美資良質を悉く具備する漢詩である。ローランの馬を奔馳せしめんが爲めには、日本的な生命を吹き込まねばならぬ。然らざる限り、漢詩は我國に於て發達することは決して望まれぬ事であらう。

秋 妃

ルミ・ド・グウルモン作

長城 堀口九萬一譯

秋妃涉西園
纖腰倚短垣
珊瑚踏墜葉
恍疑胡蝶魂
惜春感深花空散
綠陰情話烟籠岸
秋風起兮木葉飛

與吾情思一般亂

噫秋風

颯颯吹不窮

安得掃却深愁千萬斛

直與墜葉飛成空

秋妃緩緩步

手浥菊花露

花容一何衰

園荒斜陽暮

此苑昔曾賞薔薇

薔薇花心赤於緋

我今來兮花凋落

苔蘚滿地履痕稀

噫斜日

菊遶環堵室

嗚呼何日春光度薔薇

使吾情思甘於蜜

秋妃立黃昏

低回暗銷魂

金風吹衣袂

暮禽啼不喧

此地清遊今尙記

仰數流星舞態媚

一夢追懷跡如烟

殷勤怯語意中事

噫碧空

誰栖水晶宮

何時伴得牽牛訪織女

零露溥溥滿天風

秋妃立荒園

落葉埋履痕

滿目荒涼處

黃草招幽魂

疇昔新盟膠漆固

情緒宛如合歡樹

秋風起兮粟我肌

魂欲飛越清郊路

噫秋風

颯颯吹不窮

安得掃却深愁千萬斛

直與墜葉飛成空

秋詞

ルミ・ド・グウルモン作
長城 堀口九萬一譯

靜境卿快來
滿目入秋天

萬籟歸幽寂
歸鳥落照邊

只有爛斑櫻葉紅
似卿唇頭紅欲燃

424

425

靜境卿快來
滿目入秋天
靜境卿快來
滿目入秋天
金氣透肌骨
草間露華鮮
幸有秋日暄可愛
卿心快活亦復然
青山罩清靄
遶我夢寐邊

靜境卿快來

滿目入秋天

林梢風鳴咽

棘荆殘草纏

唯有松柏亭々綠

不改其色綠逾鮮

靜境卿快來

滿目入秋天

靜境卿快來

滿目入秋天

風叫山徑暮

遠聽似湧泉

山鳩無數出草間

碧落鼓翼聲戛然

靜境卿快來

滿目入秋天

靜境卿快來

滿目入秋天

漫々碧天遠

日月頻轉旋

昨日寸々抽春草

已見殘葉似花艷

五彩蘚苔貼

疑吾在花前

靜境卿快來

滿目入秋天

千林木葉落

萬壑鎖寒烟

只有落葉未全死

金衣飛揚舞風前

頻舞影婆娑

瞻望眼欲穿

沙市開港談判奇聞 嘘のやうで眞實の話

その頃盛んに流行つた俗謡の文句の『我が國は神武この方戦争して、負けし例のなき國ぞ』といふ通りの、えらい元氣で連戦連勝した日清戦争の結果、明治二十八年四月下關で媾和條約が成立了。いふまでもなく我國からは、伊藤公、陸奥伯が、清國からは李鴻章、李經方が、この歴史的舞臺に登場した。

この媾和條約によつて、新たに支那の湖北省荊州府沙市を開港場とし、わが國の領事館がそこに置かれることになつた。

そこで、翌年の二月、僕は沙市へ領事に任命された。赴任の途次、上海へ著いたのは、二月の末頃だつた。さて上海へ来て沙市の様子をきいてみたところが、誰れ一人として知つてゐるものはない。僕は少なからず驚かされた。上海邊りでは、とても沙市のことなんか分りやうがないが、せめて漢口まで行つたなら、少しは様子が知れるだらうといふ心細い話だつた。

この時、僕の通譯官として隨行して來てくれた人は、先頃まで大審院長をして居られた横田國臣氏の令弟三郎君だつた。この三郎君は最初の支那語の留學生として、外務省から北京に遣られた人であつて、支那の風俗習慣には頗る精通してゐた。しかのみならず、その後も久しく公使館の通譯官をしてゐたから、支那文學などにも中々明るかつた。今度沙市に領事館が置かれるやうになつて、專管居留地設定の談判などがあるからといふので、僕と一緒に沙市へ赴任することになつた。

僕達は上海へ著くと、その頃唯一の日本旅館だつた東和洋行へ泊つた。そして、そこに二週間程滞在してゐる間に、僕達は毎日一緒に町に出て種々雑多の道具類を買ひ集めた。何しろ始めて沙市に領事館を建てるのだから、何から何まで、用意して行く必要がある。そこで卓子、椅子、書棚、敷物、諸帳簿類や、宴會用の皿、鉢、銀器等を洩れなく仕入れた。そして、これなら宜しいと云ふので、僕達は英國の商會ジャーデン・マヂソンの永昌號といふ船に乗つて愈々沙市へ向つた。

ちやうどそれが三月の初めで、長江沿岸の春の日影がのどかに水の上を照らして、僕達は晝のやうな江南の春色を賞でながら、漢江へ向つて進んだ。この旅中の感想には、色々面白いこともあるが、ここには抜きにして、さて僕達は一週間か十日の後漢口へ著いた。

上海を立つ時、横田君は漢口日報の主宰をしてゐる舊友の宗方小太郎君に、萬事宜しく頼む旨、電報を打つておいたので、宗方君は僕達を出迎へる爲めに漢口の波止場に來てくれる。

僕は先づ驚きの目を見張つた。宗方君は、支那服を著て辯髮で、そして、横田君を見ると、早口で支那語を二人で喋り始めたのだ。勿論僕に向つては、巧みな日本語で話すのだが、横田君と話を交へてゐる時の様子が、どうにも日本人とは受けられぬので、僕はその時横田君に、『僕達を迎へに來てくれたあの宗方君といふのは、本當の日本人なのかい?』と怪しんで訊いた位だつた。それ程迄に外形は全く支那化してゐた人であつたが、その實宗方君は非常な愛國者で、或る筋の内命に依て日本の爲めにこの方面で窺かに活動してゐる人であることを横田君から聞かされた。

この宗方君の案内で、僕達は漢口の旅籠屋に一先づ落ち着いた。早速僕達は宗方君に沙市の様子を訊いてみたところが、沙市の向ふの宜昌といふところへは外國船が著くから、宜昌の様子なら、少しほは知つてゐるが、どうも沙市のことばかりは、漢口でもよくは分らないといふのである。

その時、宗方君は、ちやうど今漢口にゐる知人のカトリックの宣教師のことを思ひ出し、この人は元沙市にゐたことがあるのだから此の人に訊いて見たなら、少しほは様子が分るに違ひないと、宗方君が先に立つて僕達をそのカトリックの坊さんのところに連れて行つて

くれた。

一見して有徳な高僧らしいこのペール・ブノア（ブノア神父）法師は僕達に色々と親切に沙市のこと話をしてくれた。この坊さんの話によると、沙市の町は随分商賣の盛なるところであるが、外國人などは勿論ゐないし、やつと三四年前この坊さんの後を繼いで沙市附近や宜昌方面の布教を擔當してゐるペール・フランソアといふ佛蘭西人の宣教師がたつた一人ゐるだけのことであるといふのだ。それのみならず此の地方は一般に外國人に對して中々反感の強い地方であるとのことであつた。

そこで横田君が、「先づ差し當り河岸の近くで領事館に當てる家を借りなければならぬんですが、あなたは沙市に長ぐらしたから御存知かと思ひますが、一體そんな家がありませうかしら？」と訊くと、坊さんは「いやたとへ手頃な家があるにしたところで、あなた方がそれをお借りになるには隨分困難だらうと思ひますよ。外國人に喜んで家を貸すなんかといふ人は、餘りなささうに思はれますね。聞けばあなた方は、領事館を開く準備のため、卓子や椅子や食卓や寝臺などをあの船においてあるといふことですが、そんな大きな荷物を持つて沙市へ下りられたところが、沙市の港口にはそんなものをおく倉庫もなく、家もないし、城内に旅籠屋がない譯ではありませんが、どれもこれも御存知の通りの狭い、汚ない支那流の旅舍で、とても、あなた方が、そんな荷物を持つて、行かれるやう

なものぢやありません。そればかりでなく、第一あなた方を泊めてくれるかどうかさへ私は疑つてゐます。兎に角、神父フランソアに紹介狀を今直ぐ書きませう。幸ひ新築した沙市の教會堂も四五箇月前に落成しましたし、その傍に在る神父の住宅もちやうど昨今出来上つた筈です。そしてその教會堂には、西洋流の小學校の教場見たやうなものが一棟作られた筈ですから、あなた方は神父の住宅へ泊めてお貰ひになつて、荷物などは暫くその教場の方に置いていたらいいでせう。そこに四五日もおいでになる中に、適當な領事館の家を探しになつたらいいでせう。」と僕達にいつてくれた。

僕達の乗つて來た永昌號は、荷下ろしをしたり、又上流の宜昌の方へ運ぶ荷物を積んだりして、二三日此處に停泊してゐたので、僕達は漢口で色々と沙市のことを見ひ合せてみたが、どうしても餘りよく分らなかつた。

そこで横田君と相談して、どうせ訊いても分らぬ位なら、先きは行き當りばつたりと云ふことにして、先づ出かけることにしようぢやないかと、腹を極めて宜昌行の永昌號に再び乗り込んだのだ。

四五日にして僕達は目的地の沙市へ着いた。成程今度日本が始めて開港したところだけあつて、どうやら將來望みのあるらしいことはうなづけたが、打ち見たところ河岸には桟橋もなければ岸壁もなく、人家の如きは一軒もなく、唯の荒涼たる岸にしか過ぎなかつた。

上海や蕪湖や安慶や、漢口の繁華な町續きを見て來た僕達の目は、この沙市がひどく殺風景に見えたのも無理はなかつた。

しかし幸ひに横田君が支那の事情によく通じて、その上支那語もよく分つてゐるので、荷物の運搬にても、直ぐ人足を雇つて宣教師の家迄なんの苦もなく運ぶことが出来た。

教會堂は船著場から左方四五丁のところにあつた。見ると成程新築早々のことが分つた。

すつかり西洋風で、その附近にあつては、十分人の目をそばだてる程綺麗だつた。
案内を請ふと辯髪で薄青色の木綿の着物を着た支那人の小使が出て來た。横田君がそこで神父フランソアにお會ひ申したいといふと、小使は、「神父さんは今宜昌へ出張中で、一週間後でなけりやお歸りにならない」といふのだ。僕達は顔を見合せて當惑した。船は出發して了ふし、日は暮れかかるし、こちらに旅籠屋があるかと訊けば、この近邊にはないといふ、城内へ入れば旅舎はあるにはあるが、外國人なんかはおいそれと泊めてくれまいといふのであつた。そこで僕達は腹を決めて、神父が歸つて來て怒るかも知れないが、幸ひ空いてゐるのだから先づ神父の住宅の方に寝泊りしようぢやないかといふので、先方の都合など構はずさつきと二人で上りこんで了つた。

呆氣に取られたのは、支那人の小使だ。しかし、そこへ行くと横田君は慣れたもので、實はその度胸のよさには僕からして驚いた位だつた。ちやうど横田君は、自分の家に歸つ

たやうに振舞つてゐるのだ。

支那には茶館（日本の茶屋兼仕出屋に當る）の組織が如何にも都合よく出來てゐるので、その日の僕達の夕飯は早速茶館に言ひ付けて持つて來させた。翌日荷物を教場の方に、しばらく積ましておいて、そこで横田君と一人で沙市の町へ出て、なるだけ川岸に近いところに、領事館に適當な家屋はないかとあちらこちらを尋ねて歩いた。

幸ひ、沙市で知名の商店の事務所兼倉庫に宛てておいた、大きな一棟の家屋が川岸に在るのを貸してもいいといふことになつたので、僕達は五日目にそこへ移つた。
僕達がそこへ移つて、二日経つとフランソワ神父が宜昌から歸つて來た。僕達はそこで恐縮しながら、よくそのわけを話すと、この坊さんは腹立つどころか微笑さへ湛へて、「それはいいことをなさつた。」といつてくれた。

愈々領事館が見付かつたので、そこで事務所の配置などをすつかり終へて、横田君が公文を以て、荊州の知事俞鍾穎といふ人に宛て、下ノ關條約第六條に基き、今度沙市へ日本領事館を開く旨を通知した。そして同時に別の手紙で、僕は領事として、ここへ今度新たに著任したといふことと、何れ近日中に公式訪問をしたいが、そちらの都合はいつ頃がいいかと、訊ねてやつた。すると直ぐ返事が來た。明後日午前十時頃お待ちしてゐるといふことだつた。

で當日、僕は横田君と轎に乗り、支那流の禮式に従つて、澤山の供を連れて、公式訪問に出掛けた。

荊州府の府廳は沙市の中を距ること、南方五清里のところにあつて、三國時代に關羽が始めてここに城を築いたといふことが、荊州府史に出てゐるその城址なのである。

愈知事は、五十歳前後の、見るからに上品な人だつた。僕達は、先づ著任の披露をして、今後は公私とも何分よろしくなどと挨拶した後に、色々雑談を交はして、戻つて來た。

その時立ち際に知事が、明日答禮をしたいが差支へはないかと、訊いたから、どうぞと答へると、翌日知事はちやんと、やつて來た。

僕は始め支那流に隨つて、茶菓を饗した。暫くすると横田君が、上海から持つて來た白葡萄酒をコップに注いで出した。ところが愈知事は、そのコップを如何にも珍らしさうに眺めて、さて、「非常にうまいが、一體これは何といふものですか」と訊くのだ。横田君が、「これは西洋で出來る葡萄酒です」といつたところが、知事は歎美の目を見張るやうにして、

「支那の詩に『葡萄の美酒、夜光の盃』といふのがあります、ははあ、して見ると、それはこれですな」といつて、冗談ともつかず、眞面目ともつかない愛嬌を振り撒いて、それから「うまい、うまい」と舌打ちして、初めての訪問なのに拘らず白葡萄酒一本を傾にして、

け盡して了つた。

横田君は大いに外交手腕を發揮して、「そんなにお氣に召しましたのなら、上海から少し餘分に持つて來てをりますから、五六本差し上げませうか。」といつた、ところが、知事は、「それは有難う」と何遍もお禮をいつて、ひどく喜んでゐた。そして「この酒は陶磁器の盃なんかで飲んでは、まづさうですから、序でに、その『夜光の盃』も戴けませんでせうか」と懇望するので、請はれるままに尋常一樣の硝子製のコップをやると、それを大切さうに支那服のかくしに入れて、愈知事は心から上機嫌で歸つて行つた。

しばらくすると、人夫共が何か大きな甕みたやうなものを、わいわい言つて領事館に擔ぎ込んで來たので、横田君が出て見ると、驚いたことには、もう愈知事は、立派な封筒に入れた紅色唐紙の書翰箋に墨色鮮やかに先刻の感謝を述べ、次ぎに數年來貯へてゐた紹興酒を持つてゐるから、これを少しばかり呈上するといふことが認めてあつた。

かういふ風に、愈といふ人のやることといひ、話す工合といひ、如何にも渙然と打ち融けてゐて、しかも少しも品格を落すことなく、終始僕達を窮屈がらせず、何ともいへない親しみを感じさせるのは、さすがに國が舊いだけあつて、交際術の巧みなのに、僕達はすつかり感服して了つた。

★

その後幾日か経つて、日本専管居留地の選定に關し愈知事のところへ手紙を出した。

「過日お話して置いた通りに、あなたの下役を領事館迄お遣はし願ひたい。さうすれば、私は其人と相談して河岸の適當なところを選びたいと思ふ」といつてやつた。

すると知事は早速二人の役人を領事館に寄越した。

この話の面白くなるのはこれからだ。

その一人は李士宏といひ、他の一人は王體仁といつた。李士宏は三十七八歳位で、王體仁は四十二三かと思はれた。李士宏の方が、どうも上役らしく見えた。背の高いすつきりした美男子風の人で、王體仁は肥満な、而していつもにこにこしてゐて、支那人の所謂好好爺といふ様子だつた。

そこで僕達はこの二人を應接間へ請じて支那茶を出した。するとこの二人は一通り時候の挨拶が終へると、目をきょろつかせて、應接間に飾つてある時計や額や西洋風の置物などを、如何にも珍奇な物でも見るやうに眺め廻し、次いで椅子や卓子や、殊に青い卓子掛などは一々まくつて見たり、觸つたり、撫でたりし始めた。

そして、何をいふかと思つたら、王體仁は愛想よく『府知事から承れば、あなた方は西洋の葡萄酒とかいふものを、お持ちになつたとのことですが、どうか私共にも一杯飲まし

て頂けませんか』といふのだ。そこで僕は横田君にそつと耳打ちして、「今日この二人は、居留地設定のことについて來たのだと思うてゐたが、なんだか唯の挨拶の訪問に來たのか知ら」といつたところが、横田君は、支那流では事務上の話なんかはいつも斯う云ふ工合に序幕を開いてから後で、漸く眞面目な話に移るのですと言つた後で、兩人に向つて、お易い事ですと云つて、小使に命じて酒盃を取寄せて葡萄酒を頻りに二人に勧めた。二人は先日の愈知事と同じやうにうまいうまいといつて頻りに杯を傾けてゐたが、王體仁は急に思つたやうに、だしぬけに。僕の雅號は何といふかときいたり、年齢は幾つだとか、詩を作るか、畫を描くか、鴉片を吸ふかなどと、妙なことばかりきくのだ。僕はこんなことをしてゐたらいつまでたつても埒が明かぬと思つたから、そこで僕は切り出したものだ。

「今日はわざわざ御足勞を願つて、有難うございました。さて豫ねて、御承知の通り日清戰爭の結果、馬關に於て、調印せられた條約第六條に基き、この沙市を開港場として、そしてこの河岸の附近に、日本人の商工業を營み、且つその他の便宜の爲め、居留地を設定することになりました。就いては、その居留地の選定に關して、これからあなた方と御相談申し上げたいと思ひます」といふと、いつもにこにこ微笑してゐる王體仁先生が、いぶかしさうに眉をひそめて、横田君にいつた。

「いま領事から承れば、確か日清戰爭とかいふ事をおつしやつたやうですが、一體あれ

は何のことをいつてゐるのですか」

横田君は直ぐ、それを僕に大體通譯して聞かせたから、僕はそこで、

「一年間も戦争をしてゐて、やつと去年の四月馬關で媾和條約となつた、あの日清戦争のことをいふんです」と答へると、王さんと李さんは顔を見合せて、何かひそひそ相談した後で、王がこんなことをいひ始めた。

「あなた方は、お二人で、戦争した戦争だとおつしやりますが、我清國はこの近年外國と戦争なんかした覚えはありません。御冗談ぢやないんですか？ その上、世界中のどんな國でも、支那と戦争して勝つ國などが、あらう筈のものではありません。ですから、今あなた方のおつしやつた日清戦争などといふのも、全くこれ迄聞いたこともないので、實以て私共には初耳なんです。」と眞面目くさつていふので、僕達は益々目を丸くして驚いて了つた。

そこで横田君が日清戦争の由來から説き起し、即ち朝鮮の獨立の問題から、日清兩國の衝突となり開戦となり、遂に旅順の陥落となり、次で、李鴻章が媾和使として日本へ来て、馬關條約が調印せられ、その結果で沙市が新たに開港場となつた次第を説明して聞かせた。併し李も王も如何にも腑に落ちぬやうな様子をしてゐた。

さうかうしてゐる中に、正午近くなつたので、二人は又何れ午後から上りますといつて、

悠然と歸つて行つた。彼等が歸つた後で僕は横田君に

「あの人達は日清戦争のあつた事を本當に知らないのかね、苦力なんかならないざ知らず、なんほ支那人だからといつて、役人ともあらうものが、あれ程の日清戦争を知らん理由は無からうぢやないか白ばくれるにも程がある」といつたところが、横田君は「ええ實際に知らないのです、白ばくれてるのでもなんでもなく、彼等は全く知らないのですよ」と答へたので、僕は愈々驚いて了つた。

二時半になつて、又二人が領事館へやつて來たので、そこで日本の商人が將來ほつほつここへ來て店を開き營業を始める事になるだらうから、その便宜の爲め、將來の波止場の附近に、専管居留地を設定したいのだが、あなた方のお考ではどの方面が日本居留地として許されるのか、と訊いて見た。ところが二人とも又大いに驚いたやうな顔をして、ひそひそ話し合つてゐたが、今度は李が、

「昔から普天之下莫レ非^{モルハ}王土^ニ。率土之濱莫レ非^{モルハ}王臣^ニ。」といふ通り、どこの國の者だらうが、一度支那へ來た以上は、我々は十分にそれを保護し、よく取扱つて、その商賣なり船舶事業なり工業なりを、なんでもさせてやるのだから、そんな居留地なんぞといふ不用なものわざわざ捨てる必要はありません。どこへなりと日本の商賣人はその都合の好さうな處へ店を開いても構ひやしません。」と大層なことをいふので、そこで僕達二人は

まるで、學生に向つて國際法か法學通論の初步でも説明するやうに租界の性質や、その管理の仕方や、租界地と支那の権力との區別などを説明して、聞かせたけれど、彼等にはまるつきり近世の法律思想などといふものが頭にないので、いくら僕達が子供にものをいひ含めるやうに諄々と説明しても、どうしても、了解が出来ないものと見えて、相變らず彼らは、「そんな租界などといふ狹苦しい小さなものを捨へるよりも、今ままにしておけば、どこへでも、日本人は、来ていいのだから、そんな莫迦氣た窮屈なものなんか作らない方がいい」とあべこべに僕達に忠告を與へるといふ始末だ。

こんな風に、初めての會見に於て雙方の考が餘りに掛け離れ過ぎてゐるので、僕達はただただ呆れるばかりで、それに日暮近くなつたので、いづれ又後日といふことにしてその日は別れることにした。

こんなことは小さい島國の日本などに於ては到底想像も出來ない話であるが、その領土の廣大な支那では、こんな嘘のやうなことが全く以て眞實であつたのである。何しろ當時の支那の湖北地方などと來たら、世界の大勢からは一世紀二世紀はおろか、四五世紀も遅れてゐたもので、なんの事はない正に唐宋時代の、否それよりも尙一層天下泰平の武陵桃源境裏の飽くまで長閑な支那であつたのだ。

それから僅か三十年後の今日、共產黨や便衣隊が盛に横行して奪掠、放火、強姦、殺戮

が夜を日に繕いで行なはれつつある、今の湖北の有様に比べて見ると、支那人が好んで屢屢口にする『桑海の變』といふ文句がびつたり當て嵌る程の變りやうと言はねばならぬ。

その當時の支那の有様を熟く知つてゐる僕には、人一倍今日この感が深い理由である。

さうかうしてゐる中に、渝知事からの手紙で今度北京外務衙門から鴻齡元と云ふ人が沙市居留地設定交渉のために、當地へ派遣せらるることになつたから、この人の来るまではしばらく租界に關する談判は見合せて貰ひたいと申込んで來た。

處がそれにも拘はらず、李と王との二人は相變らず、毎日領事館へやつて來るのである。しかし公務のことなどは一言も言はなかつた。

二人の先生達は其後も毎日位にいい御機嫌で領事館へやつて來た。ところが來る毎に僕達は勉強してゐるのであつた。といふ理由は、沙市は新たに開かれた處であるから、この地方の農工商の事情を調査して、成るべく詳しく述べ本省へ報告せなければならぬので僕と横田君は一所懸命にその調査を始めたのである。そして彼等が來ればいつも僕等は茶菓を饗した後で例の葡萄酒を御馳走してやつたものだ。すると、ある時王體仁が眞面目な調子で、僕に「あなた方は、いつ來て見ても勉強してをられるし、どうやら年恰好も同じやうに見受けますが、一體どちらの方が上役な人ですか」と訊くので、横田君が「この方が領事だから上役で僕は通譯ですよ」と答へると、王は今度は僕に向つて、尤もらしく、

「あなたはいつ来て見て勉強してゐられるが長官などといふものは勉強するもんぢやありませんよ。刀筆の吏の如く懶懶働くなんて、上官の威儀に係りますよ」といつて聞かせた。

そして今度は僕達の洋服を着てゐるのを見て、「あなた方は、日本のお役人だといはれるけれども、本當の日本人ぢやないんでせう。支那でそんな着物を着てゐるものは廣東人ばかりですよ」といふので、僕達が「日本では役人はみんなかう云ふ洋服を着てゐますよ」といふと、二人は變な顔をして、僕達を見つめてゐた。

そこで、僕達は、一つ先生方を驚かしてやらうといふので、その翌日紋付の黒紹の羽織に仙臺平といふいでたちで、接迎すると二人は僕達の姿を見るや否や、大きな聲で「これでこそ本當の日本人だ、こんな立派ないい着物を持つてゐながら、何だつてあんな猿見たやうな廣東服などを着るのですか」といつて頻りに、僕達の日本服姿を賞めちぎつた。

彼等は、廣東服と洋服との區別に至つては全然了解しなかつた。そうして彼等は日本、廣東などと口には言つてゐても日本も、廣東もどこにあるのかを彼等はよく知らなかつたらしいのである。

その内に鴻齡元が北京から、沙市に著いた。この鴻といふ人は、年の頃三十五六歳で、若い時から、フランスへ留學して、七八年間法律を學んで、支那へ歸つて來てからは北京

の外務衙門に勤めてゐたといふのである。この人が來てからは、李も王も、もう餘り莫迦なことをいはなくなつた。聞けばこの鴻さんは、滿洲旗人の名門の生れで、さすがフランスに永くるたといふだけあつて、如何にも堀抜けのした、貴公子肌の瀟洒な風采をしてゐた。フランス語の出來る鴻さんが來たので、その後は通譯なしで、自由に談判することが、出來たので僕には大變都合がよかつた。

それがために、租界設定の談判なども案外早く摂取つた。

當時は鴻さんも僕もまだ若かつた。だから二人は時々沙市の酒樓に出かけて、風流の遊を試みたものだ。

支那の藝者を呼んだのは、僕にはこれが始めてだつた。その酒樓の座敷の、氣の利いて雅致に富んだ瀟洒な構へなのが大いに僕の氣に入つた。

邊鄙な沙市に、こんな意氣な處があるのかと、奇異の感にさへ打たれたのである。そして、そこへよんだ藝者の、ひどく幽雅な立居振舞には、僕は少なからず驚いた。特にその着物や髪飾りなどの豪奢華麗なのには、尙更驚かされた。翡翠や珊瑚や琥珀や眞珠や金銀やで、頭から、胸から、腕から、指の先まで、あらん限り裝飾を凝らして脂粉紅白滿顏の化粧に微笑を湛へ、そして極めて小さな足の所謂蓮歩を運んで僕達の前に娉婷と現はれた女の姿は、實に雲の間から人間界へ臨降ましました天女かと思はれた。そして馥郁たる香

氣の茉莉花や夜來香の清鮮な生々した白い花を鳥の羽かとも思はれるやうな黒髪に並べて挿した艶麗と奥ゆかしさは、何とも言へぬ嬌婉を感じしめた。

そのときの纏足についての感想を一寸ここで述べて置かう。

沙市へ著いた當初は、纏足の婦人が、小さな足で、よろよろしてゐるのを見るたび毎に、僕はあぶなつかしいやうな感じがして、ひたすらその纏足の婦人が氣の毒であるやうにばかり感じて、少しも美しいとは思はなかつた。

然るに二三箇月経つた後では、尋常の大きな足の婦人を見ると、何となくみにくくいと云ふやうな感じがして、終には最初いやらしく思つた小さい足の婦人が、こよなく美しく見えて來た。纏足の婦人は歩行の際に兩足で直立の姿勢を保つことが出來ぬので、自然身體を左右に少しく動搖しつつ、その姿勢を保つやうにするので、その姿態が如何にも嫋々たる柳の春風になびくが如く、所謂娉婷婀娜たる様子は、纏足の婦人に非ざれば、見出すことの出來ない嬌態であるやうに思はれて、その後は尋常の大きさの足の婦人は、見るのも嫌になつたことである。不思議と云へば不思議なやうだが、人間は習慣の動物で、環境が人々の嗜好を作るのだなとしみじみ感じた。

僕達はその酒樓で彼女達が胡弓と三味線に合せて歌ふ唄を聞いて凄婉な感に打たれた。

僕は時々鴻さんと一緒に遊びに出かけた。そんな時に兎角支那語を知らぬと不便なので、

この時から、僕は支那語を習ひ始めた。

或る日やはり鴻さんと一緒に遊びに行つた時、そこへ呼ばれて來た藝者に、僕が、荊州地方に昔から傳つてゐる民謡を歌つて、聞かせないかといつた、ところで早速藝者は歌つてくれたが、それを聞いて僕は實に驚かされてしまつた。何故といふのに、その藝者が、日本の所謂本調子、二上り、三下り、といふものと殆ど同じ調子で、胡弓と三味線に合せて歌つたからである。僕は餘り不思議なので、『その調子は日本から來たのではないか。』今は、まるで日本の本調子、二上り、三下りと同じだ、といつた。ところが、その妓は、

「いいえ、これはすつと昔から支那にある歌の調子で、この地方ではどんな邊鄙なところに行つても、この歌は誰れでも皆んな知つてゐますよ。」と答へたので、僕は念のためまづいながらも、日本の本調子、二上り、三下りを歌つて聞かせてみると、不思議な位、妓達の三味線と胡弓の調子にぴつたり合つた。僕は日本の本調子、二上り、三下りを支那の奥地で聞かうなどとは、實に夢にも思はなかつた。若しこれが妓達の言ふやうに、本當に元から支那のものであつたとすれば、實際に於て、日本の本調子、二上り、三下りは或は支那からの輸入ではないかと思はれた。

日本の小學生徒が今現に歌ひつつある、あの『螢の光、窓の雪』の樂譜は勿論、西洋の古曲の樂譜に日本語の歌詞を當て嵌めたものである。これと同じやうに、本調子、二上り、

三下り、などといふものも、三味線が始めて、支那から日本へ渡つて來た時、その樂譜と三味線と一緒に入つて來て、それに日本の歌詞を當て嵌めて作ったものが、遂に本調子、二上り、三下りの元唄となつたのではないかと思はれる。もしその道の人が、この邊の消息を調べて見たら、きっと面白いに違ひない。

當時僕が沙市のある學者に訊いたところに依ると、三絃サンヘンは埃及から起り、アラビアから波斯、チベットを經て支那の四川に入り、それから楊子江沿岸に擴がつて、福建、寧波に波及し、更に琉球に渡つて、遂に日本へ傳來したものだ、といふやうな事をいつてゐたが、これは、まんざら出鱈目な説とも思はれぬが、果して、どんなものであらうか。

それはともあれ、僕は日本の本調子が支那で聞かれるのが嬉しい、といふ口實の下に、時々横田君を誘ひ出したり、鴻君を連れ出したりしたものだつた。さうしてその當時の清快な情趣は、今思ひ出しても魂魄飛んで湖北の空に彷彿するを覺ゆるものがある。

大連星ヶ浦にて

—一佛蘭西人との對話—

……東京へ來られてから、毎年必ず日本へ避暑にお出でた貴下が、二三年このかた、ぶつづり日本を袖にせられたのは……

『どうした理由ですか』とまだ僕が言ひ終らぬうちに、食後のコニヤックで微醉氣味の好い機嫌になつたアンリオ氏はフランス人獨得の饒舌をユーモア一ぱりの例の軽快な口調で、

『前よりも好いのが出来れば乗り換へるのは人情ですよ。成程、日光も箱根も、輕井澤も悪くはないが、併し大連を特にこの星ヶ浦を知つてからは、とても日本へ行く氣にはなれません。第一この大連のコスモポリタンな空氣、世界的アトモスフェールが、日本とは大へん變つてゐるので、妻や子供達は大喜びです。御覽なさい、あの斷髪の支那人の令

娘は若いイギリス人と樂しさうに踊つてゐるではありませんか。あすこで先刻から仲の良い友達のやうに、笑つたり話したりしてゐるのはお國の方とロシア人です。そしてあの右の方の芝生で寝轉んで一緒になつて遊んでゐる一團は、日本の學生と支那の學生達です。大連には排外的氣分だとか、攘夷的空氣なんかは、薬にしたくもありはしません。一寸見たばかりでも四海兄弟、萬國一家と云ふやうな平和と親愛さとが感じられるやうな気がして……ですから、避暑の場所を日本から大連へ鞍替へしたのは、私達ばかりぢやないのです。支那の内地にある英國人などは、二三年このかた、みんな此處へ来るやうになりました。その外、上海、香港、遠くは新嘉坡、ボンベーあたりの英國人などは、近年日本へは行かずに、みんなこの大連へ避暑にやつて來るやうになつたのです。今、私どものる、この星ヶ浦のヤマトホテルだけでも、百人餘りの外國人が泊つてゐます。で、此處の避暑客の數は年々増加するばかりで……』

と尙も頻りに大連禮讃を續けんとする氣配が見えたので

『大連の繁昌の爲めには誠に結構な事ですが、併し日本の……』

と、僕が言ひ掛けようとするに先だつて、聰明な、そして氣早なアンリオ氏は、解りましたと言はぬばかりに、満面に微笑を湛へて、矢つぎ早に話頭を日本に向け

『聞けば日本では近頃外國の觀光客を引き寄せる方法を研究中でツーリスト・ビュウロ

ーを始め帝國ホテル、郵船會社、大阪商船、その他各大都市の旅館なども是に參加して大大的の計畫が立てられたとやら……誠に當然な次第で、フランスの諺に『遅れたりとも爲さざるに優る』で、結構なことですが、それには先づ第一著手として東京、横濱、京都、大阪その他の大都市は勿論のこと、日光でも箱根でもドライブすることの出來るやうな道路を造ることが何よりですが、大連が私共外國人に一番嬉しいのは、この道路の好いことです。道幅が廣く、清潔で、而して延長は幾十哩の旅順迄も金州迄も、もつとその先迄迄も自動車で、馬車で、馬で、快よくドライブが出来るぢやありませんか。處が日本にはこれが無いので……ろくろく散歩することさへ……』

と恰も日本の弊所、缺點の棚卸でも始めるとするかの如き語氣なので、僕は話頭を他に轉ぜしめんと試み

『併し天然の景色は日本が』

と言ひ掛くるや否や、氏は待つてゐましたと言はん許りに

『お國の方々はいつも必ず日本の風光絶佳を御自慢なさるやうですが、併し天然の景色などと云ふものは、どこの國だつて二つや三つは絶景の場所を持たない國はありません。元來天然の景色などは、人を惹き附ける力の上から見ましては案外弱いものです。世界の三大絶景と呼ばれるのが、御承知の通りトルコのコンスタンチノープルと、ブラジルの首

府リヨ・デ・ジヤネーロと、濠洲のシドニーとですが、よくよくの好奇者でもない限り、是等の絶景を見るが爲にわざわざ南米や濠洲くんだり遠出掛けるものがありますか？ 然るにパリーはどうです？ ロンドンは、ベルリンはどうです？ 人間を惹きつけるものは、大張人間ですよ。人間的な便利と愉快と温か味が缺けてゐる處へは人は集るものではありません。フランスのある學者（アンリオ氏は隨にその名を言明したのであるが、僕が忘れたのだから一寸斷つて置く）が、人工化された天然の景色であつてこそ、始めて人間との親みを持つ事が出来る、と云うたのは名言です。人工の加はない、自然そのままの景色はどんなによいにした處で、直きそれに人が親む事が出来るものではないのです。お國の方々が景色を好愛賞鑑せらるる感情の中には、よく解剖してみますと、純然たる天然的景色ばかりではないのです。必ず歴史的背景がその後ろに潜んでゐるのであります。』

『私はお國へは五六度——しかも長い逗留の——旅行をしましたので少しは日本の歴史も嘗つて居りますが……若し歴史的背景を少しも知らずに、鎌倉や由井ヶ濱を見た處で、何等の感興の湧く筈がないぢやありませんか？ どこの國にでもありますな、ただ平々凡凡たる砂濱續きの海濱と、大震災以來特に荒涼の感を増さしめた風物の外には何の特異な景色がありますか。ところが此處がその昔鎌倉の大將軍賴朝幕府の廢墟だとか、又は此處が賴朝公の參謀梶原景時や畠山重忠の屋敷の跡だとか、將た又これが嘗て公曉が實朝を狙

つた時の大銀杏樹だとか、護良親王の土窟だとか、さては日蓮上人が奇蹟を示した靈場だとか、幾多懷古の史料が天然の景物の背後を縦横十文字に色彩つてゐるからこそ、鎌倉や由井ヶ濱も美しく見えるのです。支那人の詩句にも『景物は人によつて勝概となる』ともあります。全くその通りです。ですからこれ等の歴史や口碑を少しも知らぬ觀光客に、鎌倉や由井ヶ濱が少しも興味を惹かないのは尤もなことなのです。その他京都にせよ、奈良にせよ、或は一の谷、須磨、舞子、又は壇の浦にせよ屋島にせよ皆この類ですから、日本人も餘りに景色景色とばかり言はずに、大連や、星ヶ浦のやうに、天然の風景を利用して人工化し人間味を附加して、便利で、そして愉快であるやうにする事ですな、これが外國觀光客引き寄せ策の喫緊要事です。勿論大連でも星ヶ浦でも、まだまだ設備が十分ではありません。日本との比較上稍々よいと言ふ位のもので、歐米の避暑地などとは、とてもまだ較べものにはなりません。が、星ヶ浦などは開けてから年數が極めて浅いので、これは咎める方が少し無理でせう。

尙ほ又此處もさうですが、日本に於ても外國人が一番退屈で困るのは夜の遊びの場所と設備とが、全く缺けてゐることです。此處のホテルで、今やつてゐる普通尋常一樣の舞踊ばかりではなく、外國の避暑地には必ずある、あのカジノーのやうなものや、カツフエ・コンセールや、カツフエ・シャンタンや、カバレー、その外……觀光客、特に若い人達が、

午前三時頃まで面白をかしく遊ぶことが出来るやうな設備が肝要です。外國の観光客や避暑に来る人達は、どうせ遊びに來るのだから散財は覺悟の上で、金は少し位高く掛つても、面白く愉快に遊びたいのです。況して英米諸國の富豪の息子さん達の、若い、元氣な、獨身者などの爲めの……その點ではフランスのドオヴキールや、ビアリッツなどは如何です。貴方もまだよく覚えていらつしやるでしょう。ははあ日本でも、大連でも先づざつとあのやうにするんですなあ。處が、ドライで、渴しきつてゐる米國の金持ちの紳士等が底抜け遊びをして、うんと散財する積りで遙々日本まで出掛け来ても、惜いかな日本には遊ばせる場所がなく、遊ぶ相手方（女）がないので、米國人は日本では散財の方法がなくて困ると歎息を漏らすものが多いと云ふことですが、本當に莫迦氣てるるではありませんか。

日本人は今少し利口な、金儲けには抜け目のない國民だと思うてるたのに。要するに外國の觀光客を引き付けるには、死んだ冷めた山光水色ではなくて、生きて温かな艶美な佳人なんですよ。お解りになりましたか？』……などと滔々たる自分の雄辯に陶酔して、頻りに飲んでは注がせ、注がせては飲むコニヤックの第幾杯目のアンリオ氏は、一つ置いて隣の卓子に妻君と子供達のゐるのを忘れたかのやうに、フランス人にチビックな一種の稍々エロチックな愛嬌のある兩眼に微笑を湛へて、尙も滔々とその雄辯を續けて、果ては日本藝者の禮讃となり、日本藝者は女の中での女、婦人の精粹、女のエキス、世界のあらゆる

女性を打つて一丸となし、是を理想化したものが日本藝者です、そのやさしさ、しとやかさ、その溢るるばかりの愛嬌と、その氣の利いてゐること、察しのよい事、意に先つて旨を受ける底の目から鼻への聰明さは、たとひ世界は廣く萬國は多しと雖も、日本藝者だけは宇宙間に唯一無二です。だが惜いことに外國語を知らないのが玉に瑕、だからと氏は一段聲を張り上げて、だから此際日本の富國的一大急務は東京の眞ん中に藝者大學を立てて、彼等に英佛獨の語學は言ふまでもなく、歐米風の衣裳の着こなし、化粧の仕方、且つは各種のダンスや洋風の坐作進退を、みつしり仕込むことです。さうしたならば素質は良し、手練手管はお手のもの、これに加ふるに語學が自由自在で、嬌態艶語人を憐殺せんばやまずと來た日には、それこそ鬼に金棒、天下無敵、外國觀光客なぞは招かずして、東より西より南より北より、所謂千客萬來、珍客殺到でと、アンリオ氏はなれば冗談の如く、なれば眞面目のやうな口調で滔々と辯じ立てたのが、一卓を隔てた隣の妻君にも聽こえたものと見えて、マダム・アンリオは微笑を脣邊に泛べながら、靜かに僕達の小卓の前に来て僕に向つて、『お氣の毒ね、貴下は。今晚はすつかりアルペールの例の出鱈目な饒舌に當てられましたね。さぞ御迷惑でしたらう。で、今晚は先づこれで』と促されたのでアンリオ氏も僕も笑ひながら起ち上つて、快活に

ポン・ソワール・マダーム
ポン・ソワール・ムツシユ

因に云ふ、アルベル・アンリオ氏は隨分知られたフランスの建築家で、夫妻ともに前年伯國での舊知、氏は七年前からフランス政府の御用技師として東京に在勤してゐるの事。三年目で偶然この度星ヶ浦で邂逅したので、雙方ともにこの奇遇を心から喜んだ。氏は嘗て日本へは屢々旅行して稍々日本の風俗習慣などにも通じてゐる。九月中旬まで星ヶ浦のヤマトホテルに滞在すると言つてゐた。

東西ほくろ考

東洋と西洋とは、その風俗習慣に就て、いろいろ異つた點が多い中で、特に黒子に関する觀方ほど異つてゐるのはなからうと思はれる。日本では女の顔の黒子などは美貌の瑕瑾として現に年頃の娘さんなどはそれを苦にしてわざわざ醫師に頼んで抜いて貰ふものさへある位である。

然るに、處かはれば品かはるとは言ひながら、西洋では、黒子を美貌の道具立ての一つに數へて尊重してゐるのである。

第一その名稱からして全く異つてゐる。日本でのほくろは、漢字の黒子、駄子、又は痣に當るのである。而して痣にはほくろの外に又あざと云ふ訓が付いてゐるので、あざの小さいのが黒子である、ほくろであるのだ。今大槻文彦さんの言海を見るに下のやうな註釋がついてゐる。

「ほくろ」黒子、駄子（愚管抄には「ははくろ」とあり、「ははくそ」の轉。その再轉

化なり。古くは「ハハクソ」今又「ホクソ」人の皮膚に生じて小さく黒く點を爲せるもの」としてある。そのやうに「ははくそ」「ホクソ」であつて、つまり「くそ」なのである。處がほくろは西洋では「くそ」どころではない。大切なものである。その名からして艶麗である。西洋では「ほくろ」のことをグレン・ド・ボーテ (grain de beauté) と云ふ。翻譯すれば、「美の豆粒」と云ふのである。嗚呼何と美くしい名ではないか、「美の豆粒」とは！

だから西洋では日本のやうにそれを抜き取るどころではなく、否却て是を大切にするのである。若し生れつき「ほくろ」のない婦人方は、人工的に是を模造してその顔面に黏着するのである。

この人工的のほくろのことをフランス語では「ムーシュ」と云ふ。「ムーシュ」とは「蠅」と云ふ意義である。白い美しい顔の上の黒一點は、恰も白磁の花瓶に一匹の蠅がとまつたやうだと云ふ形容から來たものださうである。何ものでも美化して形容したり命名したりする處が如何にもフランス人らしくて好いではないか？

さてその人工的「ほくろ」、即ち「ムーシュ」とはどんなものかと云ふに、黒色に染めたタフタ（薄地の帛）を天然のほくろの大きさに似せて、小さな圓い形に切つたものである。而してその裏面には絆創膏に似たやうな薬品が塗つてある。だから一度顔面に貼り著

ければ、容易^{たやすく}剥け落ちるやうな氣遣ひはない。

今その起原を尋ねて見るに、以前歐羅巴^{アラブ}でまだ種痘術の發明せられなかつた昔に在つては、天然痘の爲めに動もすれば顔面に痘痕の殘つてゐた婦人方が少くなかつた。それ等の貴婦人達がその痘痕を巧みに隠す事を色々と工夫して、終に「ムーシュ」を發明したものだと云ふ事である。その皮膚の白いこと雪を欺くばかりの美しい顔に、一點黒色の「ムーシュ」を附著して見た處が、黒と白とのコントラスト、即ち反對色の效果の爲めに、白色はますます白く見へて美人の容色が一段と引立つて見へるので、我も我もとは眞似る婦人が多くなつて、遂には痘痕も何にもない婦人方まで「ムーシュ」を用ゐるやうになつて、そこで「ムーシュ」の大流行となつたものであると云ふことである。そしてそれを始めたのがイタリヤである。イタリヤでは、隨分昔からその風が行はれてゐたものだと云ひ傳へられてゐる。

それが十六世紀に始めてフランスに傳播し、十七世紀十八世紀の頃、特にルヰ十五世時代にはフランスに於て大々的の流行となつて、上下貴賤の差別なく婦人と云ふ婦人は化粧用として皆この「ムーシュ」を用ゐたもので、實に「ムーシュ」の全盛期とされてゐる。

その當時の「ムーシュ」の著け方は、今は大分異つてゐるのである。當時の「ムーシュ」の著け方を見るに少くとも必ず三點以上としてあつたものである。左の目の上に一つ。

右の目の上に一つ。これは是非とも著けることになつてゐた。この外に頬部に著ける分は各自の好き好きに随つて二つでも三つでも御勝手次第としてあつた。今に残つてゐるその頃の美人画を見るに、折角美くしい顔面に五つも六つも「ムーシュ」を貼り附けたのがあるが、今から見ると、ただただ奇異なと云ふ感じを起させる位のものであるが、併し流行と云ふものは不思議な力を持つてゐるもので、それが流行だと云ふことになると、どんなに不思議な、妙な、變てこな衣裳でも、髪の形でも、お化粧の仕方でも、その當時の人にはそれが美くしく見えたのである。フランス大革命時代に流行した「アンクロワイアープル」（その名からして『本當とは思はれぬ』と云ふ意味だ。）の服装などは、最も好い一例だと思はれる。

概して、西洋の婦人方が流行を追ふことに浮身を棄す有様は、我々東洋人から見ると狂氣の沙汰ではないかと思はれる程猛烈なものである。フランスのある學者が『若し倒立して歩くことが「流行」となつたとしたら、歐羅巴の婦人は些の躊躇もなく、みなそれを真似るだらう』と言うことがあるが、これは多少皮肉ではあるが、西洋婦人の流行を追ふ心理状態を巧みに言ひ現はした言葉だと思はれる。「ムーシュ」もこの流行心理の作用で、十八世紀頃には大變はやつたもので即ち時粧となつたのである。

今では「ムーシュ」の流行は大分衰つたやうだが、併しまだ全く無くなつたわけではな

い。今でも古典的な舞踊、例へばムニユイ又は西班牙踊を踊る時には必ずこれを著けることになつてゐるやうである。又平常でも艶美を増す爲めに是を用ゐる婦人も少なくはない。だから巴里あたりの化粧品の商店には大小色々な形をした「ムーシュ」を賣つてゐる。而してその「ムーシュ」の色合にも深黒、青黒、淺黒などと種々變つたのがある。婦人方は自分の皮膚の色や目の色や髪の毛の色などとその調和を保つに最も適した色合、即ち自分に一番よく似合ふ「ムーシュ」を撰んで是を貼附するのである。

併し現今では、「ムーシュ」の著け方は十八世紀頃とは大變違つてゐて、眼上三點の法則などに遵ふものは全くない。今では二つ以上は著けないやうだ。その一つは目の下の少し横の方と、下唇の右か左かへ一つ著けるのが普通に行なはれてゐるやうである。尤も、その人々の顔の形や目の色や髪の毛の工合と照し合せて、全體の調子を取る爲めに上に述べた眼下、脣邊の定石以外の處、即ち頬部に著けたり、頤に著けたりする婦人もある。だからどこぞと一定の場所を指示することは出來ないが、今その一例を擧げて見ると、目に愛嬌が足りないとか、又は下頤が長過ぎるとかいふ場合に、その間延びのした處へ一點のムーシュを入れるといふ工合である。

また「ムーシュ」は、啻に顔にばかり著けるのではない。婦人正装の場合、即ちデコルテの場合には、胸から肩から背中迄を露出するのであるから、「ムーシュ」を背中にも胸

にも腕にも著ける。要するに黒と白とのコントラストを利用して全身にその艶美を増す爲めの一つの化粧法なのである。

上述して來たやうに、東洋では「ほくろ」を贅物として邪魔物扱ひにし顰蹙してゐるのに反して、西洋では厄介視せず、否寧ろ是を艶美を増すところの「美的豆粒」として尊重し、人工的にさへ是を模倣するに至つた原因は何であるかを尋ねてみると、臆説ではあるが、それは東洋人と西洋人との皮膚顔面の色や、毛髪や、眼の色を異にしてゐるのが、その第一の原因ではなからうかと思はれる。

東洋人の黄色い顔面に於ける「ほくろ」は、黄色と黒色との色調がそぐはぬので「ほくろ」があれば顔が却つて醜く見えるのである。加之、東洋人は髪の毛も、目の色も共に黒いのであるから、黒子は邪魔にこそなれ、決して美を増すものとはならない。

然るに白皙人種の西洋人にあつては、その蒼白いやうな顔面に一點黒色の「ムーシュ」は、白と黒とのくつきりした反対色の作用で白色は益々白く光彩を放ち、美は益々美しく見えるのである。是に加ふるに、西洋人の目の色の薄青く、その髪の色のシアーテン（焦げ茶色）、ブロンド（茶褐色）又は金髪、甚しきに至つては白色かと怪しまれる程の淡黄色などのさへもあるので、一點黒色の「ムーシュ」の爲めに、顔全體に活氣を生ずる效果を

齎らすからである。例へば巧妙なる繪師が、山も林も野も川も一白皚々たる雪景色に、二三羽の飛鴉をあしらつて、その繪の全體を活動させるのとよく似てゐる。又ちやうど「萬綠叢中紅一點」といふのと均しく、僅か一點の紅色の爲めにそれを圍繞する紳群は一段とその綠色を増すが爲めに、その叢全體が生氣溌剌、新鮮な氣が庭全體に溢れるやうに見えるのと同じく、西洋人の滿白顔中黒一點は、その顔色を殊更に白く美しく見せるのみならず、一點の黒子の爲めに顔全體に生々した清鮮さを與へ、その嬌笑に靈波を漲らせ、その愛嬌に一種の情熱を加へるかの如く、約言すれば西洋人の顔貌には、黒子はその美を助けるものとなるのである。これが即ち西洋では黒子が大切にせられ、東洋では厄介視せられる所以なのである。

その外にまた、東洋と西洋とでは、美人に關する見方の違ふことも、亦この問題に大なる關係があるやうに思はれる。東洋の美人に關する形容詞を見るに、端正、靜肅、舉止幽閑などと、専ら「靜淑」を婦人の一美德とし、同時に婦人美の一つの資格としてある。随つてその外部に現はれる形としては、よく前後左右の釣り合、即ちシンメトリーが取れて正整して居らねばならぬのである。ちやうど希臘の古彫像のやうに、正整静淑が美人の容貌の様式なのである。だから嬌艶も、婀娜も、又は内部の熱情も、心の内に静かに籠めてゐて、是を外部に現はさないのである。隨つて自から表情

のない顔面なのである。まんざらないでは無いにしても、どうも表情が薄いのである。

然るに西洋では、是に反して、表情を主とし、表情が缺けてゐては美人でないとしてあるのである。だから西洋の美人の形容詞には、東西共通の、沈魚落雁、閉月羞花とか、花顔柳腰明眸皓齒とかといふ美人に共通の資格の外に、「動」といふものが美人たる資格の内に含まれてゐるのである。此處が大いに東洋とは異なる點である。例へば近代美人を論ずるものの中としていつも引合に出される路易十五世の嬖幸マダーム・ボンバードールの美人振を描寫したものなどに就いて見ても、その一端が窺はれる。今ゴンクウル兄弟が書いた同夫人の傳記などは西洋流美人の見方に就てのよい一例となるだらうと思はれるから、左に抄録してみよう。ゴンクウルは先づ、ボンバードール夫人の顔の色艶のいいことや、その脣や、目や、髪毛や、頬や、笑靄や、その肢體やの何一つとして豔美ならざるはなく、男の心を惹き付けぬものはないと賞めちぎつた後で、さて是に附加へてボンバードール夫人が美人中の美人である所以は、何よりもその表情の早き動きであると断定し、そしてその表情の變化と同時に、その顔面の賑やかさは、實に言語に絶する程で、約言すれば彼女の靈魂の絶え間なき動きを、その艶麗と嬌媚との間に自然に現はすのであるから、男の心を動かし、唆り、挑發し、是を魅惑するにはこれ以上力の強いものはないといつてゐるのである。

此の如く心の動きを表情を美の一大資格としてある西洋に於て、黒子が美となるのは自然の勢である。何故かといへば、黒子は表情を助けて是を強調せしむるに大いに役立つからである。例へば静かに平らかに鏡のやうに澄み切つた水面の上に投げられた一箇の石のやうなもので、その水面を動かして變化を生じ澁々たる波動を起して所謂畫龍の點睛となるからである。

黒子が西洋に於て尊重されるのは、彼等が「動」を愛する心理作用から來るのである。然るに東洋の美は「靜」の内に存するので、随つて正整がその必要條件となるのである。「動」は正整を亂すから、正整を主とした美には「動」を排斥するのである。これ即ち黒子が西洋で貴ばれ、東洋では嫌はれる原因の一かと思はれる。

隨つて、西洋には美人の黒子に關した文獻もあれば、繪畫も随分多くある。これに關する逸話なども少くはないが、わざとここには省くことにする。が一例を擧ぐれば先頃ボオル・モオランが書いた小説「三人女」の中のクラリスに就いて、

……彼女は黒子をつくりかへる。

……

……彼女は黒子棒を拭く……

などとある。これは「ムーシュ」を貼り著けるのではなくて、黒子を顔面にすぐに描く今流行る簡便式なのである。

ところが東洋には黒子のある美人の繪などはあらう筈もなく、婦人の黒子に關する文献なども、あるはあるが、矢張り黒子を邪魔物扱ひにした記録なのである。西鶴の「好色一代女」の卷の一の「國主の艶姿」の一節で、それは國主の爲めに艶姿を求める一老人が、「大かたこれにあはせて抱えたきとの品好み」の人相書の中に、……當世顔はすこしく丸く、色は薄花櫻にして、目は細きを好まず鼻の間せはしからず、口小さく、齒なみあらあらとして白く……、姿に位そなはりて心立おとなしく……、身に黒子ひとつもなきをのぞみとあれば……』と云うてある。

だから、日本では全身に一つの黒子^{黒子}さへないのが理想的美人の典型としてあつて、西洋とは正反対である。

日本では昔から男でも女でも、黒子は人物のイダンチテー即ち人違でないことを證據立てる役にしか立たなかつたやうである。傾城阿波の鳴門、巡禮歌の段にお弓が「とは疑もない我娘と、見れば見るほど稚がほ、見覺のあるひたひのほくろ」や近江源氏先陣館、盛綱陣屋の段に、佐々木四郎左衛門高綱の子の小三郎『眉に一つの黒子迄父親に此の似よふ』

や、其他、一ノ谷鐵軍記で、義經にその正體を見抜かれた彌平兵衛宗清の彌陀六の眉間のほくろ等は隨分名高いものであるが。いづれも黒子に就ての美醜を論外とした觀方である。

隨筆集游心錄

昭和五年二月十二日印刷
昭和五年二月二十日發行

初版一千五百部

定價二圓五十錢

著作者 堀口九萬一

刊行者 長谷川巳之吉

東京市麹町區一番町五
第一書房

振替東京六四二二三
電話九段三三四四

印刷者 萩原芳雄
製本者 橋本久吉

堀口大學著	堀口大學詩集	新菊判總革特製本
堀口大學譯	月下的一群	新四六判總革
堀口大學譯	アボリネエル詩抄	定價三圓五十錢
堀口大學譯	コクトオ詩抄	四六判英國紙
堀口大學譯	グウルモン詩抄	定價二圓五十錢
堀口大學譯	ジヤム詩抄	菊判和紙刷
堀口大學譯	ヴエルエ又詩抄	定價二圓八十錢
堀口大學著	歌集男ごころ	菊判和紙刷
	特製齒切音及版	定價一圓
	新三六判攝錄四枚	定價一圓五十錢

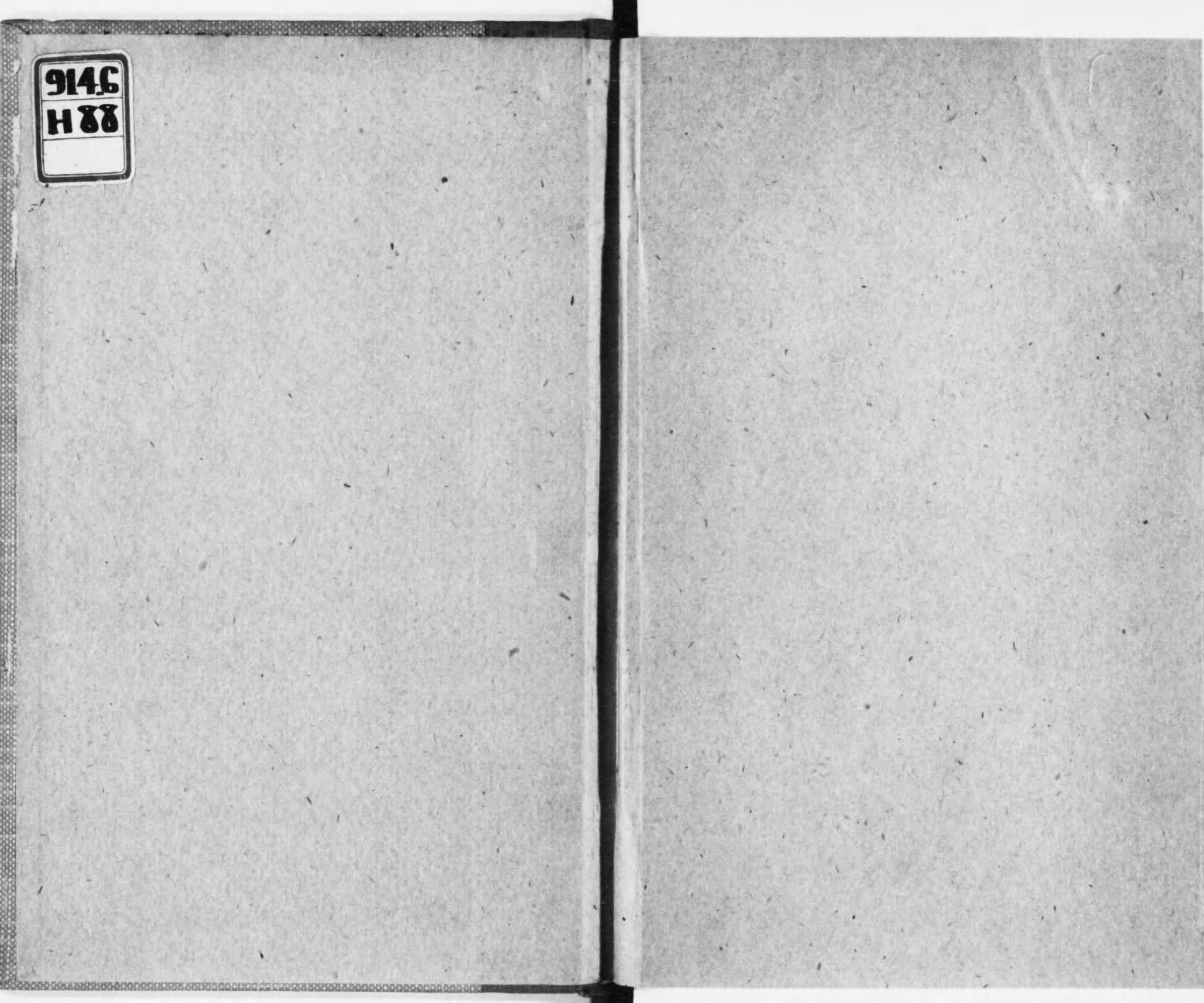
ア・ナ・ト・オ・ル・フ・ラ・ン・ス
エ・ヒ・キ・ユ・ル・の・園
新菊判三百五十頁
定價二圓五十錢
草野貞之譯
岸田國士譯
葡萄畠の葡萄作り
近刊

- 松岡譲著 隨筆 日中出見 四六判二百七十頁
松岡譲著 小說 優鬱な愛人 上巻新菊判二回八十頁
松岡譲著 小說 田園の英雄 下巻新菊判二回五十頁
松岡譲著 小說 法城を護る人々 四六判四百頁
岸田國士著 戯曲 牛山本 テル 新菊判三百八十頁
岸田國士著 戏曲 落葉日記 新菊判二百九十九十頁
岸田國士著 戏曲 屋上庭園 新菊判二百八十九十頁
岸田國士著 戏曲 チロルの秋 四六判二百七十頁
柴田天馬譯 小說 聊齋志異 四六判二百八十九十頁
柴田天馬譯 小說 聊齋志異 四六判二百八十九十頁
柴田天馬譯 小說 聊齋志異 四六判二百八十九十頁

- 萩原朔太郎著 萩原朔太郎詩集 新菊判絵本特製本
西條八十著 西條八十詩集 定價六圓
茅野蕭々譯 リルケ詩抄 新菊判絵本特製本
三富朽葉遺著 佐藤春夫著 定價六圓
佐藤春夫著 上田敏遺著 新菊判四百頁
三木露風著 三木露風詩集 定價三百圓
室生犀星著 室生犀星詩集 定價五百圓
木下杢太郎著 木下杢太郎詩集 定價七百圓
田中冬二著 詩集 青い夜道 新刊 四圓八十錢
新刊 二圓五十錢

3/28/5
五

- 野口米次郎譯 ゴンクナルの歌麿
野口米次郎著 歌麿北齋廣重論
野口米次郎著 春信清長寫樂論
野口米次郎著 人生詩集
野口米次郎著 抒情詩集
野口米次郎譯 ブラウニング詩集
山名格藏譯著 日本の浮世繪師
近刊
- 四六判六枚一色刷
數枚定價五圓
菊判百冊頁每冊六十頁
定價二圓
- 四六判五百頁
定價二圓五十錢
四六判特製一二三四各冊
定價一圓八十錢



終

